

## 「六角の井」伝説の誕生背景

### 天皇家と藤原家の時代

中大兄皇子（のちの第三十八代天智天皇）を中心に、中臣（藤原）鎌足らが蘇我入鹿を誅殺し、蘇我の蝦夷を自殺に追い込んで、天皇家をしのぐ勢いがあった豪族蘇我大臣家を滅ぼした大化元年（六四五）より、天皇家と藤原家の関係は密になっていった。

以来、藤原家は天皇のそばに中心人物として控え公家政治に深く関与してきた。

藤原家が全盛期を迎えたのは、平安時代中期、藤原道長（966～1027）が「御堂関白」と称された時代と考えられる。

長女彰子は第六十六代一条天皇の皇后となって、第六十八代後一条・第六十九代後朱雀天皇を生み、

次女妍子は第六十七代三条天皇の皇后、三女威子第六十八代後一条天皇の皇后、四女嬉子は第六十九代後朱雀天皇の妃となって、道長は強大な権力を手に入れ、栄耀栄華を極めたとされています。

しかし、そのことが、約三百年前に起きた「大化の改新」の当時極勢を誇っていた蘇我氏の姿に似てきたように思われる。

天皇家が政治に関わることが時代とともに薄れてきたかの様相には、歴代天皇は思うことが多々あろうとも、藤原家との外戚関係から、天皇家の親政はなかなかむづかしく、実行できない状態であったと考えられる。

このような藤原家の専横を打破しようとした天皇が現れた。第七十一代後三条天皇である。後三条天皇は二十三年にも及ぶ東宮（皇太弟）時代を経て皇位についた苦勞人で、藤原摂関家とは直接

外戚関係がなかったようです。藤原家の専横を抑え、大江匡房らの学識者を側近として重用するなど、脱・藤原家の政治を進めていったと考えられます。

後三条天皇は父が第六十九代後朱雀天皇ですが、母は第六十七代三条天皇の皇女・禎子内親王。藤原家の娘ではなく、皇族の女性を生母とした天皇の登場で、藤原家の外戚としての影響力は薄れてきたようにも思いました。権勢を極めた藤原道長の時代から、およそ七十年後のことで、道長の子孫の関白政治に関わることは大きく後退していきます。

ところが、後三条天皇は在位わずか四年半の三十九才で退位して、当時二十才の長男・東宮貞仁親王に皇位を譲ってしまいます。これが第七十二代白河天皇です。

しかし、白河天皇の生母は関白藤原頼道の異母弟・藤原能信の養

女・茂子ですから、藤原摂関家を外戚とする天皇です。実は、後三条天皇は藤原家と関係のない源基平の娘・基子との間に生まれた実仁（さねひと）親王に皇位を継がせることにしていた。そこで、完全に藤原家との関係を絶ちたかった狙いであったが、その実仁親王は一五才の若さで夭逝してしまいます。

白河天皇は実仁親王が即位するまでの「中継ぎ」と考えられていたので、実仁親王の崩御をチャンス到来とみて、我が子善仁（たるひと）親王を東宮に立てて、その日のうちに、応徳三年（一〇八六）、白河天皇は三十四才の若さで皇位を譲って白河上皇となっていきました。新たに皇位についた第七十三代堀河天皇はわずか八才でした。そして、白河上皇が自ら政治を行う「院政」を始めていき、藤原家の政治に関わることは、さらに後退していきます。

### 「院政」の時代

院政とは、天皇位を退いた太上天皇Ⅱ上皇（院ともいう）が、天皇Ⅱ王家の事実上の主人である「治天の君（ちてんのきみ）」として、天皇を後見して国政を主導する新たな政治システムのことです。

白河上皇は院御所に近臣や公卿を参集し、国政の問題を審議し、上皇である白河の決済によって問題解決を図るといふ流れをつくります。このときに初めて院政が開かれましたと考えてよいと思います。藤原氏の摂関政治は、摂政・関白にある藤原氏が、天皇を上にした働き権力を行使しますが、天皇の承認を必要とするシステムです。しかし院政においては、天皇経験者であり、現天皇の父である上皇（あるいは法皇）は、天皇の上

に立つこととなります。摂関を独占する藤原氏の政治システムを打破し、院政という新たな政治システムと、その制度を創始したのが白河上皇（のち法皇）であります。

この院政に大きく翻弄されたのが藤原忠実（ただざね）でした。関白の座にあった父・師道（もろみち）が承徳三年（一〇九九）亡くなり、忠実は二十二才で藤原一族の氏長者になります。若さもあつてか関白の座につけず権大納言の地位にとどめられます。

摂関不在のまま六年がたった長治二年（一一〇五）、忠実はようやく関白に任命されます。その二年後、堀河天皇が二十九才で崩じると、白河上皇は、まだ五才の堀河天皇の遺児宗仁親王を、白河上皇は、みずからの詔（みことり）をもって皇位につけます。第七十四代鳥羽天皇です。

さらに摂政に鳥羽天皇と外戚関

係のない忠実が任命された。この忠実に、その後大きな波乱が待ち受けています。

それは、鳥羽天皇が、忠実の娘泰子（たいし）を妃にしたいということで、忠実は快諾したことにより、白河上皇の激しい怒りを買ってしまいます。

白河上皇は寵愛していた閑院流藤原家の公実（きんざね）の娘璋子（しょうし）―のちの待賢門院―を鳥羽天皇の中宮とします。翌年璋子は顕仁（あきひと）親王を生みます。この親王が、のちに第七十五代崇徳天皇となります。

白河上皇は自分に断りなく藤原忠実の娘を入内させることは、治天の君の皇位継承権を犯すことと見たのです。

しかし、鳥羽天皇は、顕仁親王は自分の息子となっているが、実父は祖父・白河上皇の実子ではないかと思っていました。

保安元年（一一二〇）白河上皇は忠実の閑白の座を罷免し、忠実の嫡男・忠通を閑白につけます。

藤原摂関家を抑え強大な権力を手中に収めた白河上皇ですが、保安四年（一一二三）、まだ五才の顕仁親王を東宮とし、皇位につけます。第七十五代崇徳天皇の誕生です。その時、鳥羽天皇は二〇才で退位させられてしまいます。上皇とはなりましたが、自分の実子に継がせる皇位継承権を奪われたように感じ白河法皇に対する不満が高まっていきます。

その白河法皇も、大治四年（一一二九）、七十七才で崩御します。

#### 「藤原家の内紛」

忠実は長承元年（一一三二）、鳥羽上皇から再び内覧の院宣を受け政界に十二年振りに復帰します。そして、翌年、娘泰子が鳥羽上

皇の皇后に迎えられます。さらに力を蓄えつつあった武士を召し抱え、地方の荘園の新規開発、拡大にも乗り出します。

忠実には、閑白の位にある嫡男忠通がいるが、謹慎期間に生れた「頼長」という利発で勉強熱心な息子の存在が大きくなってきます。

頼長を寵愛していた忠実は、兄の忠通に代えて頼長に摂関家を継がせていこうとした。忠実は鳥羽天皇に頼長への摂関の移譲を働きかけたものの拒否されてしまいました。

そこで、忠実は久安六年（一一五〇）藤原氏の長である氏長者の権限を忠通から取り上げ頼長に与えます。同時に、閑白の座を弟に譲ることを拒否した忠通を親子の縁を切るまでに発展してしまふ。

氏長者となり内覧にも任命された頼長は、貴族間の綱紀肅正に取り組みますが、その規律は余りに

も厳しすぎたので、貴族の間では「厳し過ぎたる左大臣」と言われ恐れられるようになっていった。この厳しさが頼長から一步も二歩も離れる貴族が多くでてきた。

一方の忠通は、父忠実への不満と、弟の頼長への憎しみが増すばかりでした。そこに頼長へ反発する貴族たちは、忠通と結びついてくることは自明のことでした。

こうして藤原摂関家の内紛は、それは、貴族社会全体を巻き込む抗争へと発展していく様相になっていきます。

「皇位をめぐる対立」

藤原摂関家が内紛している頃、天皇家においても深刻な対立が垣間見られるようになってきました。鳥羽上皇は亡き祖父白河法皇に對しての血脈問題や皇位継承のことで積年の不満が噴出していまし

た。

まず、鳥羽上皇は院の第一の近臣・藤原顕季の孫娘得子（のちの美福門院）との間に生れた体仁（なりひと）親王を保延五年（一一三九）、東宮の座につけます。

そして、二年後の永治元年（一一四一）には、二十三才の崇徳天皇を退位させ第七十六代近衛天皇を誕生させます。

崇徳天皇は上皇となり、体仁親王が立太子になった宣命が、崇徳天皇の「皇太子」でなく「皇太弟」となっていたことが判り、そして、崇徳上皇は皇位継承問題から外れるように仕組まれてしまったわけです。

しかし、久寿二年（一一五五）鳥羽法皇から期待された近衛天皇は十七才の若さで亡くなります。近衛天皇は関白忠通と内覧の頼長の養女を入内させていましたが、ともに男子を宿すことはありません

んでした。ここで、東宮の座を誰にするかが問題となってきます。

崇徳上皇としては自分の息子重仁親王に皇位が回ってくると期待しました。しかし、皇位については鳥羽法皇と璋子との間に生れた雅仁親王（のちの第七十七代後白河天皇）でした。

鳥羽法皇は、なによりも故白河法皇が指名していた崇徳の系統に皇位を渡したくない思いが優先したのかもしれない。

ここにおいて、皇統をめぐる鳥羽法皇と崇徳上皇の対立は抜き差しならぬ状態になってきた。

「保元の乱」

後白河天皇が即位した二年後の保元元年（一一五六）、鳥羽法皇が崩御します。これをきっかけに、ともに深刻な内部対立を抱えていた天皇家と藤原摂関家、それと有

力武家を二分する大きな内乱が勃発します。保元の乱です。

保元の乱は、京都を舞台に繰り広げられた初めての内戦で、貴族や都人たちに大きな衝撃を与えました。しかし、夜襲をかけられた上皇方はあっけなく崩壊し、戦いはわずか四時間ほどで、天皇方の一方的な勝利に終わります。

乱の原因は、鳥羽法皇の後ろ盾を失った藤原忠実とその次男頼長に、反対勢力は武士を集め、頼長の屋敷に乗り込み、後白河天皇への謀反の証拠を見つけたとして、頼長に流罪を言い渡しました。頼長は負けじと挙兵を決断し、朝敵の汚名を逃れるため崇徳上皇に接近します。

崇徳上皇は鳥羽法皇に疎んじられ、後白河を皇位につけたことに不満を抱いていたので、後白河を倒して、皇位継承権を手に入れるチャンスとみて頼長と手を結ぶこ

とを決意。その頼長・崇徳上皇側には平家一門から平忠正、源氏からは源為義、為朝父子が味方することになりました。

一方、関白忠通と後白河天皇側には、平清盛や源義朝など名だたる武将が加わります。

こうして、鳥羽法皇の死からわずか九日後、保元の乱の火ぶたは切られました。

頼長・崇徳上皇の軍議で源為朝は「夜討ちに勝るものはない」と献策しますが、頼長は戦いの方法を知らず「卑怯」と却下してしまふ。為朝は兄・義朝が必ず夜討ちを仕掛けてくるだろうと予見して、その却下には口惜しかった。

その夜、為朝の予想通り天皇方が夜討ちをかけてきた。為朝の守る陣地に、平清盛の軍勢が攻めてきたが、清盛も怖気づく為朝の強弓は清盛の軍勢をケチらしてしまふ。

しかし、兄の源義朝が崇徳上皇と頼長の陣取っている白河北殿に火攻めをかけると、上皇方は大混乱に陥り上皇と頼長は脱出。為義、為朝父子は奮戦もむなしく、それぞれ都を落ちていった。

その後、父為義は出頭したが、清盛の強固な斬首の主張により、息子の源義朝に切られてしまう。為朝は逃亡先の近江国で病に倒れ湯治中に捕らえられ都に引き出される。死罪は免れないとこであったが、都人はその勇士を見ようと騒ぎになり、天皇も見物に行幸されたと伝えられます。

為朝は、その武勇を惜しまれ、自慢の弓を二度と射ることができぬように腕の肘を外され、伊豆大島に流刑となった。

流刑地の大島でも数々武勇の伝説を生み出します。その一つが鎌倉の天照山へ放った弓の「六角の井」の伝説となります。

「まとめ」

奈良時代から平安時代にわたり天皇家と藤原家で連綿と日本の国政を担ってきたが、この保元の乱を契機に武家の政治的な発言力が飛躍的に向上し、対して公家の力が後退していくという、まさに日本の政治体制の変革期となった出来事であったと考えられます。

そして、この二年後には平治の乱がおき、平清盛が台頭し華麗な平家文化を築き上げていきます。その平清盛一門の勢力も二十二年後の治承四年（一一八〇）には源頼朝による鎌倉武家政治の成立へと時代は移っていくのです。

【完】

（文責 清藤 孝）



白河法皇



藤原鎌足



中大兄皇子



源為朝



源頼朝



平清盛